

博士学位論文審査報告書

Summary of Doctoral Thesis and Report of Examination

研究科長 殿: 下記のとおり、審査結果を報告します。

To the Dean: We report the result of examination for the Doctoral Thesis below.

学籍番号 Student ID	4012 S 005 - 1	学生氏名 Name	Cheng, John William
和文題名 Title in Japanese	マスメディアおよびソーシャルメディアが震災復興に果たす役割と効果 - 東日本大震災を事例として		
英文題名 Title in English	The Role and Effects of Mass and Social Media in Post-Disaster Recovery - A Case Study of the Great East Japan Earthquake		

記

1. 口述試験参加教員 Faculty Members Involved in Oral Examination

① 審査委員会主査 Chief Referee of the Screening Committee

氏名 Name	三友 仁志 印	専門分野 Field of Specialization	情報通信経済学
所属 Affiliated Institution	アジア太平洋研究科	資格 Status	教授
博士学位名 Ph.D. Title earned	博士(工学)	取得大学名 Name of Institution	豊橋技術科学大学

② 審査委員会副査(審査委員 1) Deputy Advisor (Member of Screening Committee 1)

氏名 Name	Gracia LIU-FARR R 印	専門分野 Field of Specialization	国際移動、社会階層論
所属 Affiliated Institution	アジア太平洋研究科	資格 Status	教授
博士学位名 Ph.D. Title earned	博士(社会学)	取得大学名 Name of Institution	University of Chicago

③ 審査委員 2 Member of Screening Committee 2

氏名 Name	中嶋 聖雄 印	専門分野 Field of Specialization	経済社会学
所属 Affiliated Institution	アジア太平洋研究科	資格 Status	准教授
博士学位名 Ph.D. Title earned	博士(社会学)	取得大学名 Name of Institution	カリフォルニア大学バークレー校

④ 審査委員 3 Member of Screening Committee 3

氏名 Name	大塚 時雄 印	専門分野 Field of Specialization	情報通信経済学
所属 Affiliated Institution	秀明大学英語情報マネジメント学部	資格 Status	准教授
博士学位名 Ph.D. Title earned	博士(国際情報通信学)	取得大学名 Name of Institution	早稲田大学

⑤ 審査委員 4[該当者のみ] Member of Screening Committee 4 [if any]

氏名 Name	印	専門分野 Field of Specialization	
所属 Affiliated Institution		資格 Status	
博士学位名 Ph.D. Title earned		取得大学名 Name of Institution	

[時限 / Period] 1st: 9:00-10:30, 2nd: 10:40-12:10, 3rd: 13:00-14:30, 4th: 14:45-16:15, 5th: 16:30-18:00, 6th: 18:15-19:45, 7th: 20:00-21:30

2. 開催日時 Date / Time	2014 年(YY)/ 11 月(MM)/ 13 日(DD) ※18:00 ~ 19:30 (Time)
3. 会場 Venue	19 号館(BLDG No.) 310 室(Room No.)
4. 合否判定 Result	<u>合/Passed</u> ・否/Failed ※該当する方に○ Circle as appropriate
5. 添付資料 Attached document(s)	4 枚 pages #和文 4,000 字程度、もしくは英文 1,500 語程度。ただし、論文題目のみは、和文・英文を併記すること。 #Approximately 4,000 characters in Japanese, or 1,500 words in English. The Doctoral Thesis title, however, must be written in both Japanese and English.

題名：The Role and Effects of Mass and Social Media in Post-Disaster Recovery – A Case Study of the Great East Japan Earthquake

申請者：John William Cheng

1. 本論文の主旨

2011年3月に発生した東日本大震災は未曾有の災害をもたらした。その克明な映像がわが国のみならず、全世界的に提供されたという点において、メディアが果たした役割はきわめて特徴的であった。メディアや情報通信が提供する情報の効果は、それらから人びとがいかに影響を受けるかということに等しい。わが国では2011年7月にアナログ地上波放送が終了しデジタル地上波放送に変更される予定であったため、多くの世帯でテレビ受像機の買い替えが進み高精細な映像を見ることができたことは、マスメディアの役割を拡大させた。同時に、個人間のコミュニケーションを実現するソーシャルメディアが急速に普及した段階での災害でもあったため、マスメディアとともにソーシャルメディアが果たした役割は実際に極めて大きかったことが想像できる。これらのメディア情報は、震災直後の人びとの行動に影響を与えたのみならず、被災地内外の人びとを様々なかたちで動機づけ、復旧、復興に向けた動きを加速させ、さらには国内外から多くの物的、人的支援が寄せられるきっかけを与えたと考えることができる。

本論文はこのような問題意識に立ち、メディアが提供する映像などの情報が、震災後の人びとの行動や意思決定に与える効果について、東日本大震災を事例にとり、定量的に把握することを試みた。特に、マスメディアとソーシャルメディアがそれぞれどのように震災後の復旧、復興において人びとに影響を与えたか、さらにはどのような機序によって両者が効果を発揮したかに焦点を当て、研究課題の設定を行った。以下に述べる課題設定に基づき、3つの説モデルを設定した：

- 1) 震災復興において、マスメディアとソーシャルメディアがソーシャルキャピタルの形成にどのように影響を与えたか。特に、テレビとインターネットメディアが震災後の災害対策行動や協力利他行動をもたらしたか。
- 2) 震災復興に関する人びとの認識にメディアがどのような影響を与えたか。特にテレビとインターネットメディアが、実社会における社会参加を促進したか。
- 3) マスメディアとソーシャルメディアを同時に使用することが、社会事情の認知にどのような効果をもつか。特に、例えばテレビ視聴中にスマートフォンを使用するなどのマルチスクリーン視聴が社会事象に関する視聴者の知識形成に役立っているか。

それぞれの課題について、マスメディアとソーシャルメディアによってもたらされる因果関係を構造方程式モデリング手法にもとづいて記述し、2012～13年度に実施した社会調査から得られたデータを用い、統計的分析をおこなった。

メディアや情報通信は本来的に 想現実を形成するものであるが、最近では、その利便性あるいは写実性ゆえに、 想現実が社会を的確に表すことへの期待が高まっている。しかし、豊富な情報や知識が必ずしも適切な意思決定、判断をもたらすとは限らない。情報や知識が流通する 想空間と、意思決定判断が行われる現実社会とのマッピングを

いかに的確なものとするかは、情報化社会の最大の課題といえる。本研究では、上記のような視点に立ち、実証的な分析を試みた。

2. 本論文の構成と概要

第1章 「序論 Introduction」は、本論文の問題意識を述べ、背景と目的、研究対象の検討、ならびに分析に用いられている諸概念を定義し整理している。

第2章 「研究の背景と文献研究 Background and Literature Review」は、研究の対象となった東日本大震災について説明し、分析で用いられた方法やソーシャルキャピタルとメディアとの関係などに関する文献を調査している。

第3章 「理論的枠組 Theoretical Framework」は、メディアの利用によってその効果が人びとに表れるまでのプロセスを理論的に論じ、次章以降の実証分析がいかなる理論に基づいているかを説明している。能動的(active)な利用者と受動的(passive)な利用者に分け、本研究で適用される3つの理論的枠組を通じて、メディア利用が利用者に効果をもたらすメカニズムを明示している。また、本研究で対象とするメディア利用を定義している。

第4章 「分析手法 Methodology」では、本研究で行った3つの実証分析において用いられた統計的手法およびデータ収集について述べている。いずれの分析においても、構造方程式モデリング(structural equation modelling)を利用しており、またデータはオンライン調査会社を通じて収集されている。特に、データ収集に関してはバイアスの存在が懸念されるが、実際に生じうるバイアスといかにそれに対処したかを解説している。

第5章 「マスメディアとソーシャルメディアがソーシャルキャピタル形成に与えた効果 Effects of Mass and Social Media on Social Capital」は、マスメディアおよびソーシャルメディアの利用が、オンラインの市民参加を通じて信頼の形成、オフラインの市民参加および橋渡し効果といった3種類のソーシャルキャピタルの形成にどのように貢献するかを検証した。その結果、両メディアの利用はソーシャルキャピタルの形成にそれぞれ貢献しているが、オンラインの市民参加が媒介となつてのみ、間接的に効果が表れること、さらには、マスメディアとソーシャルメディアはオンラインの市民参加に相乗的効果をもたらすことが示された。

第6章 「震災復旧に関する認識と意向に対するメディアの効果 Media's Effects on People's Perceptions and Intentions」は、前章のモデルの拡張として、より受動的な人びとに焦点を当て、メディア情報に接することによる災害の「認知(perceptions)」を通じて、災害からの復興に関する市民活動への参加「意向(intentions)」に対するメディアの効果を分析した。関心、絆および心配から構成される「認知」を通じ、コミュニケーション、利他的行動および新たな災害への準備からなる「意向」に影響を与えるモデルを構築し、前章と同じデータを利用して分析を行った。マスメディアは認知に関する3つの要素に強い正の影響を与える一方で、ソーシャルメディアは緩やかながら関心や心配に作用することが示された。また、認知に関する3つの要素のうち、絆は意向に関する3つの要素に最も強く影響を与え、関心はコミュニケーションに作用し、心配は新たな災害への準備に正の影響を及ぼすものの利他的行動には負の効果を示した。また、震災の被害を経験した人びととしなかつた人びととの比較では、後者のほうがメディアによる影響が強く表れるなど、興味深い結果が示された。

第 7 章 「マスメディアとソーシャルメディアの融合による効果 Effects of Convergence between Mass and Social Media」は、スマートフォンやタブレット端末の急速な普及により、仲間とのコミュニケーションをとりながらテレビを視聴するといった、いわゆる「ながら視聴」や「マルチスクリーン化」といった現象が急速に一般化することによって出現した新たなメディア融合の効果を検証している。これは、メディアの融合において、新たな発展の方向を示唆するものといえる。このようなメディア利用形態が知識の獲得や理解に寄与しているのかを統計的に検証した。被災 3 県と関東圏から新たにデータを収集し、因子分析によって 4 つの因子を抽出し、構造方程式モデリングによる分析を行った。テレビおよびソーシャルメディアの同時利用が社会事象の理解に正の相乗的効果をもたらすことが期待されたが、マスメディアによる直接および間接の効果の大きさに比べ、ソーシャルメディアの効果はかなり小さいことが示された。

第 8 章 「研究の総括 Discussion」は、冒頭で設定された課題に対して、本研究で実施した 3 つの分析を通じて、どのように答えることができたかを述べ、マスメディアとソーシャルメディアを通じた情報の提供が大震災後の復興に大きな影響を与えたと結論づけている。そのうえで、今後起こりうる大災害において、メディア情報を適切に提供することの重要性を説いている。同時に、本研究の発展の方向性と、分析の限界についても言及している。

第 9 章 「結論 Conclusion」は、本研究を総括している。

なお、本論文は英語で執筆されている。

3. 口述試験での質疑応答

本論文審査委員会は、申請者から提出された学位請求論文を査読し、2014 年 11 月 13 日に 2 時間余にわたり口述試験を実施した。主たる論点は以下の通りである。

- ・章の相互関係がより明確となるようにすべきである。
- ・分析によって得られた知見が、実際に人びとにどのような意味をもつかといった記述を丁寧にすべきである。
- ・文献レビューと分析手法の解説に繰り返しがみられる。各章に集約すべきである。
- ・構造方程式モデリングを採択したことの妥当性を丁寧に記述するべきである。

口述試験では、指摘や質問に関して適切に回答が示され、修正すべき点については、最終提出までに適切に修正することとなった。審査委員会は修正意見に対する対応表とともに、修正が適切になされていることを確認した。

4. 評価と審査結果

以上のように本研究では、東日本大震災後における復旧・復興活動や将来に起こりうる大災害対策を事例に、マスメディアとソーシャルメディアから得られる情報が、人びとをどのように動機づけるかという課題設定に基づき、広範なデータ収集により、その影響を統計的に解析した。インターネットを通じて提供されるソーシャルメディアは、個人間のコミュニケーションを実現する手段として急速に普及しているが、現時点ではその影響の大きさはマスメディアには及ばないものの、それとは異なった効果の人びとに及ぼすことにより、その意義を高めている。また、両メディアが相互に補完して、よ

り効果を高めることも確認された。

本論文の特徴は、震災復興の現状に特段の配慮を払った上で、両メディアの影響を客観的かつ定量的に評価するためのフレームワークを提案し、実証的にその有効性を検証したことにある。震災後、多数の調査研究が行われているが、多くは定性的な考察にとどまっており、本研究はその点においても、新しい分析の枠組みと結果とを提示している。観測可能な変数から構成される概念的な潜在変数間の関係を推定するために確立された構造方程式モデリング手法に基づくことにより、評価手法の汎用性を保っている。客観的かつ包括的に実証分析する枠組みに基づき導出された結果を考究し、政策提案までも導出することができた点に大きな特色があると言える。メディアの利用と震災後の復興に関する人びとの行動や意思決定指標に関して広範なデータ収集を行い、それらに基づき緻密な統計的解析を行なうことにより、枠組みの実証可能性を確認し災害後におけるメディア情報の役割に関する客観的評価を導いたことは、本論文の独創的な点であり、困難な研究を成し遂げた貴重な成果が盛られている

口述試験の内容を踏まえ、論文に関して慎重かつ総合的に審査を行なった結果、博士学位請求論文としての水準を十分満たしているものと判断し、これを受理することに全委員が合意した。

2015年1月6日

John William Cheng 博士論文審査委員会

主査 早稲田大学教授	博士(工学)(豊橋技術科学大学)	三友 仁志
早稲田大学教授	博士(社会学)(シカゴ大学)	ファーラー・グラシア
早稲田大学准教授	博士(社会学)(カリフォルニア大学)	中嶋 聖雄
秀明大学准教授	博士(国際情報通信学)(早稲田大学)	大塚 時雄